

明治から昭和にかけて産業の発展に寄与した 歴史的価値ある工作機械等を動態保存・展示しています。



旋盤 一手回し動力装置付き

明治から昭和にかけて、ベルトによって伝動される集合運轉方式に使われた段車式普通旋盤です。動力は最初手回しのはずみ車でしたが、その後蒸気機関、電動機に代わりました。



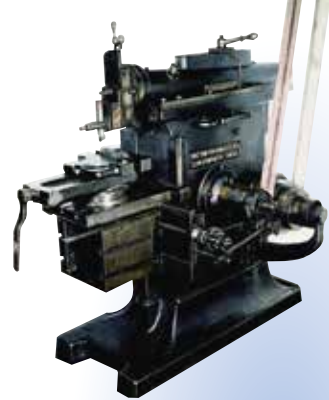
旋盤 (昭和10年頃)

第二次世界大戦前の国産工作機械の多くはアメリカ、ドイツ、スイス、イギリスの名機をコピーしたものでした。オリジナル機とコピー機、外見上は、正に「そっくりさん」を並べて展示しています。



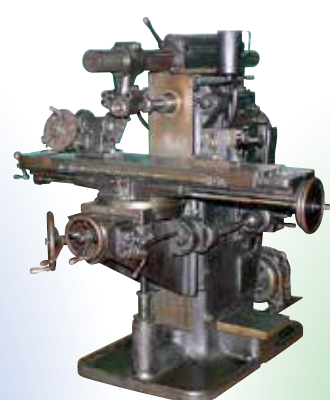
数値制御旋盤 (昭和53年)

操作盤にディスプレイが付き、コンピューターの指令で機械の動きを制御したコンピューター数値制御(CNC)旋盤。作業者が指令の一部を楽に変更できるようになり、NC機が小ロット生産にも向くようになりました。



形削り盤 (昭和6年)

刃物を前後に往復運動させ、工作物を主に平らに加工する機械。昭和30年代まで大量に作られ活躍しました。



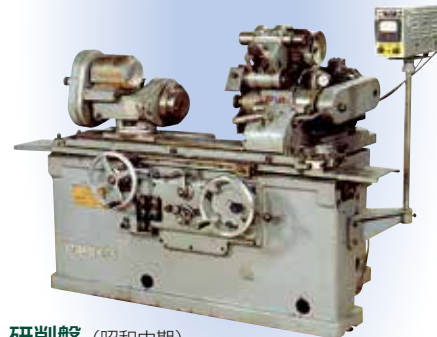
直立ボール盤
(昭和45年)

枝形のベルト伝動に代わって電動機直結全歯車式になり、大量に作られ普及し今でも多くの工場で活躍しています。



数値制御フライス盤(昭和46年)

穴あき紙テープの指令で機械(テーブル・ラム)の動きを制御した初期の数値制御(NC)ひざ形立てフライス盤です。



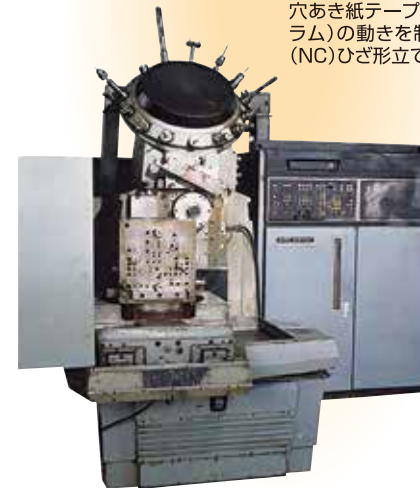
研削盤 (昭和中期)

戦後、技術提携によって作られた万能研削盤で、わが国自動車産業の発展に貢献しました。



放電加工機
(昭和29年)

わが国で初めて作られた形彫り放電加工機の1号機で、その後の放電加工の発展と普及のきっかけとなりました。



マシニングセンタ
(昭和45年)

数値制御(NC)と特異な形の自動工具交換装置(ATC)が付き、それまでの工作機械の概念を一新させた画期的な機種です。



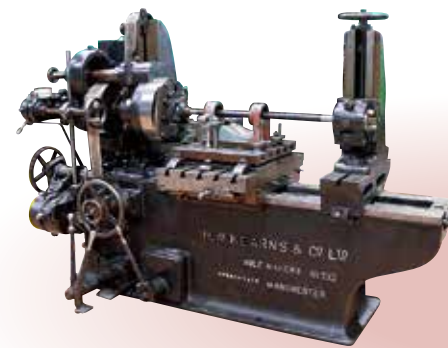
プレス (昭和6年頃)

ナックルジョイントプレス、クランクプレス、トグルプレスなどを展示しています。



鍛造工場 (昭和)

スプリングハンマ、ふいご、天然砂岩製の手回し砥石車などを展示しています。



横中ぐり盤(大正10年)

蒸気機関のシリンダや砲身の中ぐり加工用に開発されたもので、わが国でもこれを模した機種が多数作られました。



機械加工工場(大正3年～昭和後期)

木材張りの床に米国製工作機械が並び、いつでも稼働できる状態になっています。

ガラス製水銀整流器

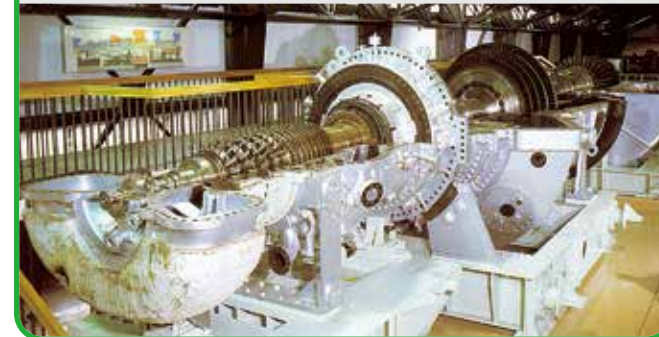
(昭和36年)

鉄道会社で使われていた、交流から直流に変える装置で、容器の特異な形状から通称「たこ」と呼ばれていました。技術の進歩により、現在は半導体方式で小形高性能になっています。



発電用高効率 ガスタービン (昭和62年)

国家プロジェクト「ムーンライト計画」で、わが国最先端の技術力を駆使して研究開発し、世界最高品位を实証しました。全長 21 メートル、重さ約 500 トン、出力 10 万キロワットです。



英国製 蒸気機関車 2100 形 (明治24年)

